

第27回 “国難、だった？ 衆院選挙

I T 生

安倍首相が「国難選挙」と銘打ち、10月22日に投開票迎えた衆院選挙。

自民党若手の筆頭株の小泉進次郎議員は「私ならそんな名前をつけない。世代の違いを感じる」といったそうだが、センスの問題はさておき、選挙そのものが「国難」の様相を呈した、いや、呈しかけた、のは間違いない。

小池百合子都知事を筆頭に野党（野合）が結集していれば、もしや国難、といった結果が想定されなくもなかった。しかし、内実を取材していたマスコミ（新聞）からみれば、そうした野合の動きは瞬間風速でしかなかった。

終始、「自民公明300議席以上」との事前の調査結果が、左右を問わず新聞をにぎわし、22日の投開票の作業が始まった午後8時すぎには、そのとおりの結果となったとマスコミが速報を打った。なぜこのような結果になったのか。国民心理からすれば、民主党政権の体たらくが記憶に刻みこまれ、民主党の再来が現実のものとなれば、まさに、それこそ国難だと感じたのだろうとみている。小池氏自身も実は、そうした国民のひとりではなかったか。



子供用の自民党公約パンフ。約束は公約より重し！

今後数年間の国事、今上天皇の退位、東アジア情勢、東京五輪、ラグビーW杯、経済政策の舵取り、真の「国難」というべき首都直下地震、南海トラフ地震を、どの政権がのりきることができるのか？ 野合の党ではとうてい及ばないと、独特のカンが働いたのではないかと、容易に想像がつく。

そんな茶番選挙のさなか、和歌山県版で掲載された「立候補者の横顔」の一文が目を引いた。自民党の二階俊博幹事長に関する記事の冒頭の一言である。

「防災なくして政治にあらず」―。けだし名言である。表舞台（東京）では決してもらさない真情を地元でのインタビューでこそ漏らしたのだろう。自分の政治家たるゆえんは、自ら体験した大水害にあったという。だからこそ二階氏は「国土」という言葉にこだわるのだ。

この「国土を守ろうという意識」の欠如が、近年の数々の政治家の不如意、世論の混乱をもたらしているのではないかとあらためて考えさせられたという、ただ一点においてのみ、今回の選挙は意味があったのではないかと、あらためて考えている。

（平成 29 年 10 月）